

## スイカ

芝山経済センター  
営農指導員 伊藤 統之



表① 交配前後の管理のポイント(大玉スイカの場合)

交配後日数	0	4	20	40	55
生育段階	交配前	交配～受精期	細胞増加～肥大初期	肥大期	糖度増加期
トンネル内 管理 温度の 目安	最高気温 30℃ 最低気温 10℃				
雌花	●雌花の質 交配前数日の日照に注意 ※日照不足で両性花になる	●受精促進 受粉後すぐに保温 (25℃程度、最低でも15℃以上)	●細胞分裂・肥大促進 気温・湿度高めの管理 ・午前中…蒸し込ませて素早く温度を上げる (30～35℃) ・午後…28℃前後、湿度を下げて夜間の結露を防ぐ ・夜温…15℃前後 ・適度な土壌水分(開花5～10日後に灌水)	●外気温が上がってくるため、換気に気を配り、トンネル内の温度を下げる	●糖度蓄積 夜温低めで(12℃程度) 樹勢の低下を防ぐ
雄花	●花粉の稔性(元気度) 交配前夜～当日朝12℃以上	●開花開始日 朝12℃以上 ●花粉の稔性 過湿・乾燥を防ぐ			
ミツバチ	●個体数確保 新鮮な餌、水の供給	●訪花活動 気温15℃以上、好天で活発化			



### 交配時のポイント

交配は定植40日後、節位18～20節が目安です。これよりも早い節位で着果すると、空洞果などの品質不良果が発生しやすくなるので注意してください。昨年は、着果不良が多く見られましたので、次の4点に注意しましょう。

#### ① 雌花・雄花の見分け方

着果を良好にするためには、良い雌花・雄花が咲くことが重要です。良い雌花の特徴は、軸が湾曲して、子房の位置がつの高さ程度にあるものです(写真①参照)。  
良い雄花は、雌花よりも2～3節後ろで次々と咲き、葯は丸く、触ると黄色の花粉が良く出ているものです(写真②参照)。葯が痩せておっている雄花は、花粉が出ていないものが多いので、交配には使用しないでください。

#### ② 温度管理

雌花・雄花の質を充実させるために、開花の約2週間前より温度管理に注意を払いましょう(表①参照)。雌花の質は交配前の日照に影響され、日照不足だと両性花となります。雄花の花粉の質を上げるために、交配前の夜から当日の

#### ③ 交配

朝昼の温度を12℃以上に保ちましょう。また、着果を良好にするためには、樹勢にも注意が必要です。換気を弱め、葉を柔らかい状態に保ちます。葉脈周辺にしわが寄り、葉色が濃く上向いていたり、薄く葉先が垂れていたりすると、着果が安定しません。

#### ④ 土壌水分

現在は、ミツバチ交配が主流となっています。ミツバチは過湿状態を嫌うため、雨天時や交配当日の低温で動きが鈍り、良質な雌花や雄花があっても活動しない場合があります。この場合、人の手による交配が必要となります。また、雄花の花粉が不良の場合、貯蔵の花粉を用いることも一つの手段です。貯蔵花粉には、「すいかふん」があります。

### 病害虫防除

育苗中のハウス内でアブラムシの発生が散見されています。発生要因は同一のハウス内で作付けした他の作物から、スイカに寄生したと考えられます。育苗ハウスではスイカの苗以外の作物を栽培せず、ロディー乳剤などを使用して育苗時の防除を行うことで、対策しましょう。

近年は、6月以降の気温が高くなっています。早い時期から、褐色腐敗病・炭そ病・アブラムシ・ダニなどの病害虫の発生に注意が必要です。  
うどんこ病の薬剤として使用されていた「ガッテン乳剤」が終売となり、代わって「シヨウチノスケフロアブル」(写真③参照)が発売されています。使用基準は2000倍、前日まで、2回以内、2成分の混合剤です。希釈倍率がガッテン乳剤と異なりますので注意してください。



写真① スイカの雌花



写真② 花粉がよく出ている雄花



写真③ ショウチノスケフロアブル  
写真提供: OATアグリオ(株)

9月の分析経過について		合計8点
残留農薬分析点数	多成分一斉分析	抑制トマト……………3点
		抑制キュウリ……………1点
		ミニトマト……………1点
		ゴボウ……………1点
		サトイモ……………1点
		米(ちばエコ)……………1点
		合計8点

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。

土壌診断点数……………合計8点